

# 大学生のアパシー傾向と親の養育態度との関連についての研究

(愛媛大学大学院教育学研究科) 毛利 光 一  
(教育心理学教室) 相 模 健 人

## A research about the relation between apathy tendency in college students and their parents' attitudes

Kouichi MOURI *and* Takehito SAGAMI

(平成20年6月11日受理)

### 1. 問題と目的

高度経済成長期以降、我が国では社会の高学歴化が進み、大学進学率が増加の一途をたどっている。その一方で、近年、これまでに見られていたような単なるさぼりや怠け、モラトリアムといった一時的な不適応状態とは異なる学生が見られるようになってきた。学業に対して慢性的な無気力状態に陥り、休学や留年を繰り返す、結局は退学になっていく学生である。こういった事例が1960年代に報告されて以降、「意欲減退学生」として注目を集めた。その後、Walters (1961) の邦訳を機に「スチューデント・アパシー」(student apathy)として定着し、今日に至っている。

土川 (1988) によると、スチューデント・アパシーは①学業からのみの退却を呈するもの、②学生生活全般からの退却を呈するもの2つに大別される。学業からのみの退却を呈するものにおいては、学業以外の生活(アルバイトなど)に積極的に取り組むことが特徴的で、その中で自分らしさを模索している、と考えられている。しかし、学生生活全般からの退却を呈するものにおいては、葛藤や不安を感じると予測される全てのことからの退却の慢性化が特徴である。さらに、抑鬱や不安などの顕著な精神症状は見られず、本人も自分の状態を深刻にとらえられない状態なので、さぼりや怠けと間違われることもある(下山; 1997)。

山田 (1987, 1998) は学生生活のみからの退却を呈するものを軽度のアパシー、学生生活全般からの退却を呈するものを重度のアパシーと分類するにとどまっている

が、下山 (1995, 1997) は実証的研究を通じて学業からのみの退却を呈するものをアイデンティティ確立や日本特有のモラトリアムの問題としてとらえる一方で、学生生活全般の退却を呈するものを人格障害的なアパシーとしてとらえ、学業からのみの退却を呈するものと学生生活全般からの退却を呈するものとを質的に異なるものである、と指摘している。

また、近年では治療的援助が必要となるような特異的障害を示さない一般大学生でも、無気力状態を呈する不適応を示す場合があり、いわゆる一般大学生のアパシー化(土川, 1985)が指摘されるようになってきている。

こういった状況の中、スチューデント・アパシーの研究において、典型的な事例を扱った研究(下山, 1996)、(土川, 1981, 1988)は多く見られるが、一般大学生のアパシー傾向を実証的に扱った研究は、鉄島 (1993)、下山 (1995)、宗像 (1997)、山形・繁榊 (2003) 等によるものにとどまっている。さらに、土川 (1988) が「スチューデント・アパシーに関する研究が、その原因を個人の性格因に求めてきている傾向がある」と指摘しているように、スチューデント・アパシーと性格因以外の他要因との関連の研究は非常に少ない。土川 (1988) によると、スチューデント・アパシーの原因として考えられるものは、個人の性格因の他に社会的要因としての学校因や家族因があげられており、これらの要因とスチューデント・アパシーとの関連性の研究は非常に重要であると考えられる。

よって本研究では、下山 (1995) にならい、一般学生

の無気力と人格障害的アパシーを区別して捉えた上で、それらと学生から見た親の養育態度との関連を検討することを目的とする。

## 2. 方 法

(1) 調査時期：2006年7月

(2) 調査対象

A 大学学生504名に質問紙を配布した。質問紙の回収率は93%、有効回答率は77.6%であった。最終的な内訳は、男子232名、女子132名、計364名、平均年齢18.6歳であった。

(3) 質問紙の構成

- フェイスシート (学部, 学年, 年齢, 生活形態, 性別)
- 下山 (1995) のアパシー心理尺度を用い, アパシー傾向の高低を測定した。項目数は15項目で, 4件法であった。
- 下山 (1995) の意欲低下領域尺度を用い, 大学生の意欲低下を領域ごと (授業意欲・学業意欲・大学意欲) に測定した。項目数は15項目で, 4件法であった。
- 東ら (2001) の FDT (Family Diagnostic Test) 親子関係診断検査の中学生～高校生用の数項目を独自に大学生向けに改変したものをを用い, 大学生から見た親の養育態度を調査した。項目数は, 父母それぞれ60項目で, 全て5件法であった。

(4) 実施方法

上記の3種類の質問紙, 合計150項目を冊子とし, 授業時間を利用して集団的に実施した。調査にあたり, 結果を集団として処理する点, プライバシー保護の点を説明した。回答に要した時間は30分程であった。

(5) 結果の処理

- スチューデント・アパシーの心理的特徴と領域別の意

欲低下との関連性を検討するため, アパシー心理性格尺度と意欲低下領域尺度との相関係数を算出した。

- スチューデント・アパシーの心理的特徴と, 両親の養育態度との関連性を検討するため, FDT 親子関係診断検査とアパシー心理性格尺度との相関係数を算出した。
- 領域別の意欲低下と, 両親の養育態度との関連性を検討するため, FDT 親子関係診断検査と意欲低下領域尺度との相関係数を算出した。

## 3. 結 果

(1) 各尺度における下位項目

① アパシー心理尺度

アパシー心理尺度15項目から得られた結果を基に成分を抽出するため, 因子分析を行った。因子分析を行うにあたり, 下山 (1995) により示されたアパシー心理性格尺度に基づき, 因子数を3に指定した。また, 先行研究 (宗像, 1997) において, アパシー傾向の現れに性差が見られることが示されており, さらに本研究においても下位尺度に性差が見られたので, 男女別に因子分析を行うこととした。

その結果, 男子学生では, 「自分のなさ」 ( $\alpha = .830$ ), 「味気なさ」 ( $\alpha = .765$ ), 「張りのなさ」 ( $\alpha = .802$ ) の3因子を採用した。女子学生では, 「味気なさ」 ( $\alpha = .861$ ), 「自分のなさ」 ( $\alpha = .756$ ), 「張りのなさ」 ( $\alpha = .732$ ) の3因子を採用した (Table 1, 2 参照)。

② 意欲低下領域尺度

意欲低下領域尺度15項目から得られた結果を基に成分を抽出するため, 因子分析を行った。因子分析を行うにあたり, 下山 (1995) により示された意欲低下領域尺度に基づき, 因子数を3に指定した。また, 因子分析によ

Table 1 男子学生におけるアパシー心理尺度の下位尺度 (\*は逆転項目)

因子名	項 目	信頼性
自分のなさ	7. 自分が本当に何をしたいかわからない。 8. 自分の将来といっても現実感がない。 10. 何となく大学まで来てしまった, という感じがある。 9. 自分のしていることに自信がない。	0.83
味気なさ	13. 何事も生き生き感じられない。 12. 自分の人生を生きている, という実感がない。 11. 心から楽しいと感じるときがある。*	0.765
張りのなさ	5. 時間がただ過ぎていく, という感じがする。 2. 毎日を何となく無駄に過ごしている。	0.802

Table 2 女子学生におけるアパシー心理尺度の下位尺度 (\*は逆転項目)

因子名	項目	信頼性
味気なさ	13. 何事も生き生き感じられない。 11. 心から楽しいと感じるときがある。 12. 自分の人生を生きている、という実感がない。	0.861
自分のなさ	7. 自分が本当に何がやりたいのかわからない。 8. 自分の将来といっても現実感がない。 10. 何となく大学まで来てしまった、という感じがある。 9. 自分のしていることに自信がない。	0.756
張りのなさ	3. いつも頭がぼんやりしている。 5. 時間がただ過ぎていく、という感じがある。 2. 毎日を何となく無駄に過ごしている。	0.732

って抽出された因子の下位尺度に性差が見られたので、男女別に因子分析を行うこととした。

その結果、男子学生では、「大学意欲低下」( $\alpha = .774$ )、「学業意欲低下」( $\alpha = .638$ )、「授業意欲低下」( $\alpha = .711$ )の3因子を採用した。女子学生では、「授業意欲低下」( $\alpha = .829$ )、「目的意欲低下」( $\alpha = .724$ )、「居場所のなさ」( $\alpha = .711$ )の3因子を採用した (Table 3, 4 参照)。

③ FDT 親子関係診断検査

FDT 親子関係診断検査項目から得られた結果を基に成分を抽出するため、因子分析を行った。また、因子分

析によって抽出された因子の下位尺度に性差が見られたので、男女別に因子分析を行うこととした。

その結果、男子学生の父親に対する FDT では、「情緒的後退」( $\alpha = .903$ )、「被拒絶感」( $\alpha = .908$ )、「積極的回避」( $\alpha = .892$ )、「期待されていない」( $\alpha = .720$ )の4因子を採用し、母親に対する FDT では、「被拒絶感」( $\alpha = .906$ )、「情緒的後退」( $\alpha = .882$ )、「被束縛感」( $\alpha = .744$ )の3因子を採用した。

女子学生の父親に対する FDT では、「被拒絶感」( $\alpha = .919$ )、「情緒的後退・回避」( $\alpha = .928$ )、「頼りにしない」( $\alpha = .885$ )、「心理的距離」( $\alpha = .740$ )の4因子

Table 3 男子学生における意欲低下領域尺度の下位尺度 (\*は逆転項目)

因子名	項目	信頼性
大学意欲低下	12. 大学ではいろいろな人と交流がある。 15. 大学の中で自分の居場所がないと感じる。 13. 大学にいるより、自分ひとりであるほうがいい。 14. 大学での時間は自分の生活の中で有意義な時間である。 11. 学生生活で打ち込むものがない。	0.774
学業意欲低下	5. 大学で勉強することで自分の関心を深めている。 3. 勉強で疑問に思ったことはすぐに調べる。 1. 教師に言われなくても自分から進んで勉強する。	0.638
授業意欲低下	6. 授業に出る気がしない。 8. 何となく授業をさぼることがある。	0.711

Table 4 女子学生における意欲低下領域尺度の下位尺度 (\*は逆転項目)

因子名	項目	信頼性
授業意欲低下	7. 朝寝坊などで授業に遅れることが多い。 8. 何となく授業をさぼることがある。 10. 授業の課題の提出が遅れたり、出さなかったりすることがある。 9. 大学からの連絡を見落とししてしまうことが多い。 6. 授業に出る気がしない。	0.829
目的意欲低下	5. 大学で勉強することで自分の関心を深めている。 14. 大学での時間は自分の生活の中で有意義な時間である。 11. 学生生活で打ち込むものがない。	0.724
居場所のなさ	13. 大学にいるより、自分ひとりであるほうがいい。 15. 大学のなかで自分の居場所がないと感じる。	0.711

を採用し、母親に対する FDT では、「情緒的後退・回避」( $\alpha = .936$ ), 「被拒絶感」( $\alpha = .904$ ), 「被束縛感」( $\alpha = .840$ ), 「頼りにしない」( $\alpha = .768$ ), 「同一視・被受容」( $\alpha = .647$ ) の 5 因子を採用した。

(2) スチューデント・アパシーと領域別の意欲低下との関連性

下山 (1995) によると、本研究でも男女ともに因子分析により抽出された、アパシー心理尺度の「味気なさ」が病的アパシーの中心的心理障害である「アンヘドニア」(快体験の希薄化, 快感の喪失) に相当しているとされている。そこで、人格障害レベルのスチューデント・アパシーと領域別の意欲低下との関連を検討するために、男女それぞれにおいてアパシー心理尺度と意欲低下領域尺度との相関係数を算出した (Table 5, 6 参照)。

Table 5 男子学生におけるアパシー心理尺度と意欲低下領域尺度の相関係数

	大学意欲	学業意欲	授業意欲
自分のなさ	0.461 <sup>(**)</sup>	0.324 <sup>(**)</sup>	0.034
味気なさ	0.625 <sup>(**)</sup>	0.231 <sup>(**)</sup>	-0.006
張りのなさ	0.407 <sup>(**)</sup>	0.183 <sup>(**)</sup>	0.117

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$ で有意 (両側)

Table 6 女子学生におけるアパシー心理尺度と意欲低下領域尺度の相関係数

	授業意欲	目的意欲	居場所
味気なさ	0.191 <sup>(*)</sup>	0.555 <sup>(**)</sup>	0.534 <sup>(**)</sup>
自分のなさ	0.240 <sup>(**)</sup>	0.477 <sup>(**)</sup>	0.394 <sup>(**)</sup>
張りのなさ	0.245 <sup>(**)</sup>	0.508 <sup>(**)</sup>	0.348 <sup>(**)</sup>

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$ で有意 (両側)

その結果、男子学生においては、アパシー心理全体、特に味気なさ と 大学意欲 の間にかなり高い相関があり、また、自分のなさ と 学業意欲 の間に若干の相関があることがわかった。女子学生においては、アパシー心理全体、特に味気なさ・張りのなさ と 目的意欲 の間にかなり高い相関があり、また、味気なさ と 居場所のなさ の間にかなり高い相関が、自分のなさ・張りのなさ と 居場所のなさ の間に若干の相関があることがわかった。

(3) スチューデント・アパシーと両親の養育態度との関連性

両親の養育態度と人格障害レベルのスチューデント・アパシーとの関連を検討するために、男女それぞれにお

Table 7 男子学生における父親に対しての FDT とアパシー心理尺度との相関係数

	自分のなさ	味気なさ	張りのなさ
被拒絶感	0.183 <sup>(**)</sup>	0.233 <sup>(**)</sup>	0.261 <sup>(**)</sup>
情緒的後退	0.154 <sup>(*)</sup>	0.254 <sup>(**)</sup>	0.203 <sup>(**)</sup>
積極的回避	0.127	0.218 <sup>(**)</sup>	0.143 <sup>(*)</sup>
期待されていない	0.206 <sup>(**)</sup>	0.144 <sup>(*)</sup>	0.186 <sup>(**)</sup>
被束縛感	0.104	0.068	0.110
愛情不足	0.113	0.137	0.219 <sup>(**)</sup>

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$ で有意 (両側)

Table 8 男子学生における母親に対しての FDT とアパシー心理尺度との相関係数

	自分のなさ	味気なさ	張りのなさ
被拒絶感	0.174 <sup>(**)</sup>	0.308 <sup>(**)</sup>	0.282 <sup>(**)</sup>
情緒的後退	0.053	0.256 <sup>(**)</sup>	0.206 <sup>(**)</sup>
被束縛感	0.133 <sup>(*)</sup>	0.096	0.200 <sup>(**)</sup>

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$ で有意 (両側)

Table 9 女子学生における父親に対しての FDT とアパシー心理尺度との相関係数

	味気なさ	自分のなさ	張りのなさ
被拒絶感	0.463 <sup>(**)</sup>	0.217 <sup>(*)</sup>	0.106
情緒的後退・回避	0.290 <sup>(**)</sup>	0.157	0.093
頼りにしない	0.266 <sup>(**)</sup>	0.086	0.015
心理的距離	0.170	-0.013	-0.047

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$ で有意 (両側)

Table 10 女子学生における母親に対しての FDT とアパシー心理尺度との相関係数

	味気なさ	自分のなさ	張りのなさ
情緒的後退・回避	0.376 <sup>(**)</sup>	0.208 <sup>(*)</sup>	0.053
被拒絶感	0.541 <sup>(**)</sup>	0.290	0.153
被束縛感	0.249 <sup>(**)</sup>	0.104	-0.025
頼りにしない	0.280 <sup>(**)</sup>	0.186 <sup>(*)</sup>	0.035
同一視・被受容	0.236 <sup>(**)</sup>	0.239 <sup>(**)</sup>	0.065

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$ で有意 (両側)

いて、アパシー心理尺度と FDT 親子関係診断検査との相関係数を算出した (Table 7, 8, 9, 10 参照)。

その結果、男子学生においては、父親への被束縛感と味気なさ・張りのなさの間、情緒的後退と味気なさとの間に若干の相関があることがわかり、母親への被拒絶感と味気なさ・張りのなさの間、情緒的後退と味気なさの間に若干の相関があることがわかった。また、女子学生においては、父親に対する被拒絶感と味気なさの間にかなりの相関があることがわかり、母親への被拒絶感と味気なさの間にかなりの相関があることがわかった。

(4) 領域別の意欲低下と両親の養育態度との関連性

両親の養育態度と領域別の意欲低下との関連を検討するために、男女それぞれにおいて、FDT 親子関係診断検査の父親版・母親版と意欲低下領域尺度との間の相関係数を算出した (Table 11, 12, 13, 14参照)。

その結果、男子学生においては、父親への被拒絶感・情緒的後退・期待されていない感と大学意欲の間に若干の相関があることがわかり、母親に対する被拒絶感と大学意欲の間に若干の相関があることがわかった。また、女子学生においては、父親への被拒絶感と意欲低下領域

の全体、情緒的後退・回避と授業意欲・目的意欲の間にそれぞれ若干の相関があることがわかり、母親への情緒的後退・回避と目的意欲、被拒絶感と目的意欲・居場所のなさ、頼りにしないと授業意欲の間にそれぞれ若干の相関があることがわかった。

4. 考 察

(1) スチューデント・アパシーの心理的特徴と領域別の意欲低下との関連性の検証

アパシー心理尺度と意欲低下領域尺度との相関係数を算出した結果、男子学生において、大学生活に対する意欲低下は、確固とした自分がなく、生活リズムに張りがなく、さらには生活自体が味気なく、生き生きした感覚が持ちにくい状態の時に生じやすい傾向が示された。また、学業に対する意欲低下は、確固とした自分を持っていない状態の時に生じやすい傾向が示された。この結果は、アパシー心理尺度、意欲低下領域尺度から得られた因子構造がほぼ下山 (1995) と同じである点、また、授業意欲とアパシー心理との関連性を除いて下山 (1995) の結果に近いという点から、下山 (1995) の結果を支持するものであるといえる。

女子学生において、授業意欲、目的意欲、居場所それぞれにおいて張りのなさとの関連が見られており、生活のリズムが乱れ、張りがなくなることが女子学生の意欲低下全体と関連していることが示された。また、目的意欲、居場所は病的アパシーの中心的心理障害であるアンヘドニアに相当する「味気なさ」との関連があることから、大学での目的を見失ったり、大学に自分の居場所がないと感じている状態の時、病的なアパシーを呈する可能性があることが示唆されたといえる。

結果の性差に関しては、意欲低下領域尺度に因子構造の違いが見られていたことから、大学に求めるもの (意欲の決定因) が男女で異なっている、ということが考えられる。つまり、男子は大学で「何をするか」という点を、女子は「何のためにするのか」や「自分の居場所はあるか」という点を重視しており、それらを持っていない状態の時に病的なアパシーを呈する可能性があると考えられる。このことから、病的なアパシーを呈している学生への対応を男女で違ったものにする必要があると考えられる。

Table 11 男子学生における父親に対しての FDT と意欲低下領域尺度との相関係数

	大学意欲	学業意欲	授業意欲
被拒絶感	0.288 <sup>(**)</sup>	0.058	0.078
情緒的後退	0.262 <sup>(**)</sup>	0.108	0.077
積極的回避	0.191 <sup>(**)</sup>	0.024	0.072
期待されていない	0.246 <sup>(**)</sup>	0.048	-0.062
被束縛感	0.036	0.003	0.028
愛情不足	0.144 <sup>(*)</sup>	0.016	0.101

\*p<.05 \*\*p<.01で有意 (両側)

Table 12 男子学生における母親に対しての FDT と意欲低下領域尺度との相関係数

	大学意欲	学業意欲	授業意欲
被拒絶感	0.266 <sup>(**)</sup>	0.098	0.087
情緒的後退	0.196 <sup>(**)</sup>	0.064	0.082
被束縛感	0.066	0.114	0.054

\*p<.05 \*\*p<.01で有意 (両側)

Table 13 女子学生における父親に対しての FDT と意欲低下領域尺度との相関係数

	授業意欲	目的意欲	居場所
被拒絶感	0.231 <sup>(**)</sup>	0.350 <sup>(**)</sup>	0.330 <sup>(**)</sup>
情緒的後退・回避	0.268 <sup>(**)</sup>	0.274 <sup>(**)</sup>	0.181 <sup>(*)</sup>
頼りにしない	0.034	0.201 <sup>(*)</sup>	0.065
心理的距離	0.192 <sup>(*)</sup>	0.153	0.187 <sup>(*)</sup>

\*p<.05 \*\*p<.01で有意 (両側)

Table 14 女子学生における母親に対しての FDT と意欲低下領域尺度との相関係数

	授業意欲	目的意欲	居場所
情緒的後退・回避	0.203 <sup>(*)</sup>	0.321 <sup>(**)</sup>	0.186 <sup>(*)</sup>
被拒絶感	0.201 <sup>(*)</sup>	0.307 <sup>(**)</sup>	0.303 <sup>(**)</sup>
被束縛感	0.216 <sup>(*)</sup>	0.125	0.200 <sup>(*)</sup>
頼りにしない	0.305 <sup>(**)</sup>	0.209 <sup>(*)</sup>	0.234 <sup>(**)</sup>
同一視・被受容	0.108	0.193 <sup>(*)</sup>	0.181 <sup>(*)</sup>

\*p<.05 \*\*p<.01で有意 (両側)

## (2) スチューデント・アパシーの心理的特徴と、両親の養育態度との関連性の検証

アパシー心理尺度と FDT 親子関係診断検査との相関係数を算出した結果、男子学生において、父母両方における被拒絶感、情緒的後退と味気なさとの間に関連性が見られることから、男子学生が両親に対して「自分は両親から拒絶されており、いつ見捨てられるかわからない」といった不安を抱き、両親との間に健全な愛着関係が形成されていない状態の時、病理的なアパシーを呈する可能性があることが示唆されたといえる。

女子学生において、父母両方における被拒絶感、情緒的後退・回避、頼りにしないと味気なさとの間に関連性が見られることから、女子学生が両親に対して、「自分は両親から拒絶されており、いつ見捨てられるかわからない」といった不安を抱き、両親との間に健全な愛着関係が形成されておらず、心理的に距離を置いている状態の時、病理的なアパシーを呈する可能性があることが示唆されたといえる。

これらの結果から、男女ともに両親に対する「見捨てられるかもしれない」という不安や、健全な愛着関係が構築できていないことが病理的なアパシーの一要因となっている可能性が考えられる。特に両親への「見捨てられるかもしれない」という不安に関しては、境界例（境界性人格障害）の成因である、見捨てられ抑鬱を生じさせる可能性が考えられる。Masterson, J. F. (1982) によると、見捨てられ抑鬱は生後15ヶ月～22ヶ月（再接近期）における母親と子どもとの関係により生じるという。母親が境界例である場合、子どもが個体化しようとする時、それを抑制するために愛情を撤去してしまい、その結果、子どもは見捨てられ抑鬱に陥ってしまうのである。

つまり、両親に対する「見捨てられるかもしれない」という不安が見捨てられ抑鬱を生じさせる可能性があり、さらに不健全な愛着形成が影響することで人格障害的であるともいえる病理的なアパシーを生じさせると考えられる。これは、実際に病理的なアパシーを呈している学生への対応として、学生本人に対する対応だけでなく、その両親を含めた対応が必要である可能性を示唆している。つまり、見捨てられ抑鬱に関しては、学生本人に対するアプローチが必要であり、不健全な愛着関係の改善に関しては、健全な愛着関係を築き直すために、学生本人に

加えてその両親に対してもアプローチする必要性が考えられる。

## (3) 領域別の意欲低下と両親の養育態度との関連性の検証

意欲低下領域尺度と FDT 親子関係診断検査との相関係数を算出した結果、男子学生において、両親に対して「見捨てられるかもしれない」という不安を抱いていた、父親を情緒的に受け入れておらず、父親から期待されていないと感じているときに大学そのものへの意欲が低下することがわかった。

女子学生において、両親に対して「見捨てられるかもしれない」という不安を抱いていた、情緒的に受け入れておらず、心理的に距離を置いている場合、全般的な意欲低下が見られることがわかった。

結果の性差に関しては、男子学生において、両親への「見捨てられるかもしれない」という不安や情緒的に受け入れていないといった情緒的な問題が大学そのものに対する意欲低下との間にしか関連性が見られていないことに対して、女子学生においては情緒的な問題が全般的な意欲低下との間に関連性が見られていることから、女子学生は男子学生に比べて、より広い範囲の意欲低下に両親の養育態度が影響している可能性が示唆された。また、男子学生は父親との情緒的な関係が大学意欲低下に関連していることから、エディプス・コンプレックスから生じる自我同一性の問題が関係している可能性が示唆された。

## 5. 今後の課題

最後に今後の課題を述べる。先に述べたように、本研究において、両親の養育態度を調査するために FDT 親子関係診断検査の子ども（中学生～高校生）用を使用した。しかしながら、質問内容が大学生の実態に合っておらず、歪みが生じている可能性が考えられるので、大学生を対象とした親子関係を情緒的な側面から調査できる尺度の作成が必要であると考えられる。また、見捨てられ抑鬱を調査できる尺度を用い、病理的なアパシーとの関連性をより詳細に検討することも必要であると考えられる。また、本研究では学生のみを対象に調査を行ったが、同時にその両親にも養育態度に関する調査を行い、親子の養育態度に関する認識の違いを調査するなど、家

族全体を調査することも必要であると考えられる。

本研究の結果から、新入生に対して、男子学生には大学での目的作り、女子学生には大学での居場所作りや、大学卒業後も視野に入れたキャリアデザインができるようなサポート活動や、両親を含めたサポート活動が考えられる。

## 引用文献

- 東洋 柏木恵子 繁多進 唐沢真弓 2001 FDT 親子関係診断検査手引 日本文化科学社
- 笠原嘉・山田和夫編 1980 キャンパスの症候群—現代学生の不安と葛藤— 弘文堂
- Masterson, J.F. 1980 From Borderline Adolescent to Functioning Adult: The Test of Time. Brunner/Mazel Publishers, New York. 作田勉・恵智彦・大野裕・前田洋子訳 1982 青年期境界例の精神療法 星和書店
- 宗像剛 1997 大学生のアパシー傾向の男女別検討 心理学研究 第67巻第6号 458-463.
- 小柳晴生 1996 大学生の不登校—生き方の変更の場として大学を利用する学生たち— こころの科学 No.69 日本評論社 33-38.
- 下山晴彦 1995 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究第43巻第2号 145-155.
- 下山晴彦 1996 つなぎモデルの実際—テニス仲間での心理援助— こころの科学 No.69 日本評論社 39-42.
- 下山晴彦 1997 臨床心理学研究の理論と実際 東京大学出版会
- 鉄島清毅 1993 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討— 教育心理学研究 第41巻第2号 日本教育心理学会 350-363.
- 土川隆史 1974 意欲減退学生について 厚生補導 95号 第一法規 [山田和夫 1990 家族関係の中でのスチューデント・アパシー 土川隆史編 スチューデント・アパシー 同朋社 140-177から引用]
- 土川隆史 1981 スチューデント・アパシー 笠原嘉・山田和夫編 キャンパスの症候群—現代学生の不安と葛藤— 弘文堂 143-166.
- 土川隆史 1985 スチューデント・アパシーと生活のリズム 教育心理第33号 771-773.
- 土川隆史 1988 大学生の登校拒否 (スチューデント・アパシー) 教育と医学第36巻第4号 341-345.
- 土川隆史編 1990 スチューデント・アパシー 同朋社
- 山田和夫 1987 スチューデント・アパシーの基本病理—長期縦断的観察の60例から— 平井富雄監修 現代人の心理と病理 サイエンス社 355-373.
- 山田和夫 1990 家族関係の中でのスチューデント・アパシー 土川隆史編 スチューデント・アパシー 同朋社 140-177.
- 山田和夫 1998 スチューデント・アパシーと現代学生の自己形成 精神科治療学 13号 297-304.
- 山形伸二 繁榊算男 2003 男子学生のアパシー傾向と Cloninger の気質・性格の7次元モデル パーソナリティ研究第12巻第1号 30-31.

